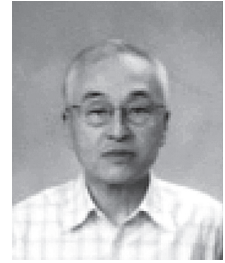


事実認識と価値判断の問題



鯨坂 真

「原発再稼働・推進」か、「脱原発で・自然エネルギー推進」か、といった価値判断は、正確な事実認識（科学的認識）に基づいて行われるべきである。科学者は事実認識をするだけで、価値判断は科学の埒外であるというわけにはいかない。価値判断は事実認識とは深い関係にある。「もっとも客観的なもっとも深い事実判断は、つねに価値判断なのである」。

はじめに

本誌 2014 年 4 月号において、北村実氏が論文「科学の価値中立性と科学者の社会的責任」の中で、筆者の論文「科学者の責任と価値判断の問題」（『季論 21』20 号、2013 年春号）について批判をされているので、これへの反論を書かせていただく。

北村氏は、「事実判断」と「価値判断」とは厳密に区別すべきもので、これを明確にしたのは新カント派の功績であるとして、この見地から、まず見田石介氏の『科学論』における見解を批判する。そしてこの見田氏に追随している鯨坂は、さらなる過ちを犯していると批判されている。

見田氏の主張は次のとおりである。

「もっとも客観的なもっとも深い事実判断は、つねに価値判断なのである。新カント派が事実判断と価値判断とを区別するのは、彼らが事実ということをつねに直接的事実としてしか知らないからである」。

この見田氏の見解を、北村氏は誤りであるとする。その理由として、氏は「楽天の優勝を喜ばしいと思う人もいれば、腹立たしく思う人もいる。楽天の優勝という同一の事実に

対し、前者は『価値』を認め、後者は『価値』を認めない。この例が卑俗すぎるといえるのであれば、いくらでも違った例を挙げることができる。ヒンズー教徒にとっては『神聖な』牛は、異教徒にとっては『神聖ではない』とか、黒人系モダン・ジャズの愛好家にとっては『素敵』なビ・バップが、クラシック愛好家にとっては『素敵ではない』とか」という事例を挙げて、事実判断と価値判断とを区別すべきことを主張されている。

ここに、すでになんらかの事実誤認あるいは見田氏の見解に対する誤解が存在する。

まず、それから指摘しよう。①見田氏は、事実判断と価値判断とを単純に同一と主張しているわけではない。「もっとも客観的なもっとも深い事実判断」が「価値判断」であるといっている。すなわち、事実判断と価値判断は単純に同じではないが、価値判断は事実判断を根拠としており、「最高の事実判断」が「価値判断」であるというのである。見田氏が単純に両者を同一視していたかのようにするのは北村氏の実事誤認である。

②「価値判断」を北村氏は「楽天の優勝」や、「ヒンズー教徒の牛」や「ジャズ愛好家のジャズ」などで理解しておられるようであるが、

キーワード：事実認識 (cognition of fact), 価値判断 (value judgment), 科学者の社会的責任 (social responsibility of scientists)

それは単なる個人の好みか趣味であり、きわめて主観的な性向・あるいは情感の表現であり、価値判断というほどのものではない。

見田氏が価値判断というのはそんなことではなく、科学的・経済学的であったり、政治的・社会的なレベルの問題であった。見田氏の『科学論』は、マルクスの『資本論』をモデルにしての科学方法論の探求でもあって、そこで「事実判断」といわれているのは、まさに資本主義社会の現実であり、したがって「価値判断」と言われているのは「資本主義の止揚」の問題であった。

すなわち『資本論』は、「商品論」から始まり、貨幣・資本の本質とその概念を解明し、基本概念を固めたうえで、資本の「本源的蓄積」の過程の歴史的事実を解明し、資本主義の発展はあくなき利潤追求を目指すことにあり、その結果、一方の極には巨大な富の蓄積を、他方の極には貧困の蓄積をもたらすことになるという事実を一つ一つ確認し、この歴史的事実の確認の上に、資本主義消滅の必然性という「価値判断」を導き出したということ。見田氏の『科学論』は解明したものである。

多くの事実判断の積み重ねの結論として「資本主義の止揚」という価値判断が導き出されるということ。見田氏は言わんとしたのだと、私たちは理解する。これを「楽天の優勝」や「ヒンズー教徒の牛」や「ジャズ愛好家のジャズ」と同じレベルで論じるわけにはいかない。

北村氏は、「残念ながら、事実判断と価値判断とを同一視する見田石介氏の主張は、俗流唯物論（客観主義の一種）の域を出ないといわざるを得ない」とも言われるが、これはまったく不当な言い分である。

これは北村氏が、70年代・80年代のソ連・東欧の一部の傾向、たとえば旧東ドイツのハ

ーンらの価値論に共感されての発言とも理解されるが、彼らの当時の議論は、マルクス主義からの退却、新カント派への譲歩あるいは妥協であったと私は思うが、それはともあれ、見田氏の価値論は断じて俗流唯物論などではないことを、見田氏が単純に、事実判断と価値判断とを同一視したのではないこととともに強調しておきたい。

ここで確認しておきたいことは、価値判断といわれるものは、野球チームのどこが好きかとか、ジャズが好きかクラシックが好きかというような、単純な個人の好みなどの主観的なレベルのことではなく、たとえば、脱原発か、原発再稼動かというような判断、あるいは地球温暖化現象にどう対処するかといったことであって、これは原子力についての深い科学的な事実認識、あるいは気象学や科学技術史などについての深い知識が基礎になればならず、まさに「もつとも客観的なもつとも深い事実判断がつねに価値判断である」ということである。

北村氏も原発については、脱原発の立場で当該の論文を書いておられるようであるが、事実判断と価値判断は厳密に区別するべきであるという立場から、どうして脱原発という価値判断が出てくるのか、私たちには理解できない。原発の危険性という事実判断とは別に、原発は嫌いという趣味判断のようなものがあるのだろうか。

1 「科学の価値中立性」論について

科学が「価値中立」であるべきかどうかは、本誌上での「科学者の社会的責任」論でも、しばしば論じられてきた問題である。北村氏もこの問題に言及して、「科学者といえども、生活者としてそれぞれ相異なる関心・欲求・願望・趣向・利害を有し、それぞれ独自の価値観を形成しており、もとより科学者自身は

『価値中立』ではない」とされつつ、それゆえにこそ科学者は、可能な限り価値観の介入を排して「科学的真理」の発見に励むという「価値中立」の態度をとるべきであると主張される。

しかし、その「価値中立」の「科学的真理」から、どのようにして価値判断が出てくるのかは説明されない。人間の事実認識とは別のところから、価値判断は突如、降って湧いてくるのであろうか。

「科学の価値中立性」ということは、新カント派、特にマックス・ウェーバーが、強調したことであった。その主張は以下に論じるが、しばしば表面的な言葉の意味だけが一人歩きして、誤解を生むことになっているように思われる。

常識的に「科学の価値中立性」といわれるのは、科学や科学者は、世間のさまざまな価値観や俗説に動かされることなく、事実のみ忠実に真理探究に努めるべきであるということであろう。これは、科学者の当然の態度であり、科学者が自己を律するときの第一の格率であろう。これは、北村氏も言われるように、『科学は価値中立である』という事実命題ではなく、『科学は価値中立であるべきだ』という当為命題である。

本誌上での論争で、坂東昌子氏や嶋田一郎氏などは当為命題として「科学の価値中立性」を主張しておられると思われるが、他の論者たとえば宗川吉汪氏などは、事実命題として論じておられるのではないかと思われる。

ところで、マックス・ウェーバーらが用いたときには、これが必ずしも明瞭ではなく、事実命題なのか、当為命題なのか明確ではないという側面があった。まずここに問題があると思われる。

ウェーバーの「価値中立論」は、現代社会においては、価値判断が深刻に対立している

という事実から出発している。彼によれば、価値・理想・当為・世界観は、人によってさまざまであり、ある人にとって善なるもの・聖なるもの・正しいものであっても、他の人にとっては悪しきもの・憎むべきもの・笑うべきものであったりする。

一方にとっての神は、他方にとっての悪魔だという事態はしばしばあって、その場合、互いに相手を消滅させねばやまぬ闘争あるのみであるという。一見すると、価値の客観性が成立するように見える場合があるが、それは「仮象」に過ぎず、根拠のないものである。

彼によれば、経済政策や社会政策という分野の総括的な根本問題となると、この仮象は消えうせ、「客観的に普遍妥当的な」価値判断はありえないことが明らかになるという。

現代においては、このように価値観が対立しているが、それゆえにこそ、科学は中立的で超階級的でなければならないし、それは可能であるとウェーバーはいう。科学的認識は価値判断とは違って「経験的実在の思惟的整序」にかかわる。価値判断は「存在すべきもの」についての判断であるから、客観性は保障されないが、科学は「存在するもの」についての事実判断であって、「全ての人に対して承認を要求しうる」、そのような科学は可能であるというのである。

それゆえにウェーバーは、科学から価値判断を追放しなければならぬこととなる。すなわち科学の領域では、特定の価値判断を主張したり、逆に反対したりすることは「禁欲」されねばならない。

つまり科学は、事実認識・経験的認識であるが、これに対して、価値判断つまり理想や世界観は、まったく次元が異なると主張される。こうして科学に対して「価値中立性」(没価値性)が要請される。科学を不偏不党の中立地帯たらしめようというのである。

この考えは、科学者が個人的な価値観や先入観にとらわれず、事実には忠実に真理を探究するべきであるという、個人的戒め（当為命題）としてならば常識的であり、俗耳に入りやすいところがあるが、彼が「価値中立的な科学は可能である」としている点（事実命題）は、はたして正しいか、大いに疑問のあるところである。

ウェーバーは、「客観性」と「中立性」とを単純に同一視し「万人に承認を求めうる中立科学」というような単純化を行っているが、現代では、「科学の階級性」がしばしば問題になるところである。この問題がまさに現代的課題である。いうまでもなく、科学の階級性が単純に主張されると、混乱の基である。

もとより、科学は、経験的認識であり、事実認識であるのは自明である。したがって、自然科学上の諸成果、そこで得られた諸法則、たとえば万有引力の法則や加速度の法則などは、階級性などとはかかわりなく客観的・中立的であるのは当然である。

しかし、現代のような階級社会では、科学の成果の利用や応用はもちろん、科学研究の目的やテーマの設定などは、階級性と無縁ではありえない。最新の科学の成果が、全人類の福祉の増進のために使われず、大企業や大資本の利潤追求のためにつかわれ、そのため科学技術が失業者の増大や、地球環境の破壊を招くなど、科学者の本来の意図と反しており、科学者の悩みは深刻である。原子力エネルギーの技術などは、まさにその典型的な事例ということになる。科学の階級性が問題になる所以である。

ウェーバーは、価値の対立という事態は認めるが、これを階級性の問題としては捉えない。価値観の対立を、ただの個人的な問題にしてしまう。「意欲する人間は彼の良心とその個人的な世界観に従って諸価値を計量し選

択する」とか「価値は各自の個性の世界の内部にある」とか、「信仰と価値理念というきわめて個人的な究極公理」といったような表現から分かるように、彼は、価値観を単なる個人的な信条・信念、あるいは個人的確信のような次元で考えている。

もし価値判断がそのような次元の問題であるならば、価値観は多種多様であり、個人の好みや趣味のようなものと同じということになる。しかし現代においては、価値観の対立が深刻な問題であるのは、それが個人の好みの選択のようなものではなく、民族や人類の運命にかかわる重要問題であるからである。「脱原発か、再稼働か」とか、「憲法9条は護るか、改めるか」とか、「集団的自衛権は行使するか、否か」などは、個人の趣味の問題とは同列に論じられる問題ではない。

われわれが当面している原発問題について言うならば、これはまさに全国的課題であり、全人類の問題である。ここでは価値判断が大きく分裂しており、国民の大多数が脱原発を希望しているのに、電力資本とその背後の独占資本と、これに依存する自民党政権がこれに反対し、原子力に依存した従来の経済運営を、なお継続していこうとしている問題である。

これを打開するには、原子力発電についての事実認識に基づいた科学者・技術者の発言が、決定的に重要である。原子力発電の技術的困難性、いったん過酷事故が起きたとき、これを収束することの困難性、発電の後に残る廃棄物を処理する技術がないこと、放射性廃棄物は年々増え続け何万年もたまり続けること、つまり「原発安全神話」は成り立たないこと、日本のような地震列島・火山列島は火山と断層だらけで、安全な地盤はほとんどないこと、さらに、原発は廉価であるという宣伝は誤りであったという事実認識は、徐々

に、しかし確実に、国民の中に広がっているが、科学者がこの事実認識を、脱原発の価値判断と結びつけて明確に発言していくことが、さらに必要であろう。

科学は価値中立であるべきで、政策的な価値判断については発言しないというような傾向は、打破されるべきであろう。

北村氏の諸説について言うならば、先に述べたように「科学の価値中立性」は、科学者にとっての「当為命題」であり、「事実命題ではない」といわれる点は、筆者も同意するが、北村氏は、事実判断と価値判断との峻別の立場をとりながら、科学者の社会的発言をどう位置づけるのかについては不明確であるといわざるを得ない。

北村氏は、事実判断と価値判断とは別個のものであるという立場に立ちながら、それとは別に、現代社会では「科学者として『研究の価値中立』の見地を堅持しつつ、これとは逆に科学の研究によって獲得した諸『事実』に対し誠実に『価値判断』の表明を行っていくという実践的責務を負っているということをはっきりと自覚しなければならない」というばかりで、価値判断と事実判断の関係はあくまで語られないままである。

2 事実認識と価値判断との「相互移行」 ということについて

北村氏は、私が先の論文で、「事実と価値、あるいは事実認識と価値評価の間には絶対的な壁はない……両者はしばしば絡み合い、相互に他に移行する」と書いていることについて、これに反対し、「これでは事実認識と価値評価は相互に浸透しあい、両者の区別は事実上消滅し、後に残るのは事実認識と価値評価の混合物だけということになる。これこそ科学的真理の代わりに『事実と価値との混合物』を容認するという最悪の見解といわざるを得

ない」と北村氏は言う。

北村氏のこの批判は、私としてはとうてい受け容れがたいものである。私の主張は、先にも述べたように、まず価値判断は単に個人的な好みのようなものではなく、一定の事実判断を基礎にもつ、すなわち、一定の客観性を持つこと、具体的には脱原発か、原発再稼動かというときに、これは個人の好みや趣味のようなもので決まるのではなく、さまざまな客観的なデータをもとにして、さまざまな議論がありうる。

原発の危険性の事実判断を根拠に脱原発を結論づける立場もあろうが、原発が現状で動かせるならば経済的であるという電力資本の立場もあろう。目の前の事実だけ見るならば、現存する原発を動かすほうが、これを止めたまま化石燃料を輸入するよりも廉価であるという価値判断もありうるであろう。現在、そのような議論が戦わされている。

しかし、目の前の経済性だけでなく、中長期の視野で安全性や廃棄物の処理の問題などを考慮すれば、その事実判断に基づき、脱原発の価値判断がなされるべきであろう。事実認識は価値判断の道案内をするのであり、事実認識は価値判断を覚醒させる決定的な役割を担っているのだというのが私の主張である。

同時に、その議論・論争の過程で、決定的な重要性を持つのは事実判断であるとしても、たとえば電力会社・その関係者が、原子力に代わる化石燃料は日本には乏しく、輸入には膨大な資金が必要であるという事実から、原発は今後も必要であるという価値判断をして、このような価値判断に惑わされて、一部の科学者が、現在の原発の一部施設の部分的改良で安全が保証されるという事実判断を主張するというようなことがありうる。

科学者・技術者も、現代社会の生活者であるから、世間の俗説に影響を受けることもあ

る。中には政府や財界の影響、あるいは、研究費の誘惑に惑わされて電力会社の言い分に加担するものも出てくる。現にそのような事例をわれわれは、いやというほど見せ付けられてきた。

あるいは、原発は危険であるという価値判断から、それではどうするかというときに、いろいろ調べてみると、わが国のような場合には、水力・太陽熱・風力・地熱・潮流などのような自然エネルギーが意外に豊かであり、その利用可能性も大きいという事実が分かってくるということもある。

あるいは従来、自然エネルギーは天候に左右されるから不安定であるといわれてきたが、さまざまな形の自然エネルギーを組み合わせ、全国的にこれらが普及されれば、わが国は面積は小さいが、日本列島は長いので、一部で天候が悪くても、他方で天候が良いとか、さまざまな事実判断が広がるということもある。すなわち、価値判断が前提になって、事実判断に影響する。

あるいは、歴史認識についていうならば、戦前の日本国民は、当時の教育政策が影響して、歴史的・社会的事実認識がきわめて乏しかった。日本列島はきわめて面積が狭い、したがって、朝鮮半島から大陸へ、植民地を広げるしか生きる道はないなどという単純粗野な価値判断に動かされて、無謀な侵略戦争に突き進んでいった。貧弱な事実判断は野蛮で粗野な価値判断をもたらす。

現代の日本国民は、いまだ不十分とはいえ、当時の国民よりは歴史の事実に学んでいるところがある。この歴史認識が、靖国派の政治家が「戦争できる国」に転換しようとするのを防いでいる。あるいは、戦前にはほとんど意識されなかった人権や平和という価値意識が、不十分とはいえ一定定着している。この価値意識が元になって世界情勢を見たときに、

戦前の国民よりは国際情勢について正常な認識ができるようになってきている面があると思われる。

このように、基本的には事実判断が元になって、価値判断が出てくるのが正常な事態であるが、場合によっては、価値判断が前提になって（価値判断に影響されて）事実判断が進む場合もあるということを含頭において、「(事実判断と価値判断の) 両者はしばしば絡み合い、相互に他に移行する」と書いた。そのような相互作用はありうるが、最終的に、価値判断を決定するのは「もっとも客観的なもっとも深い事実判断である」ということを言おうとしたのである。

したがって、北村氏が批判される『季論21』20号の小論の当該の章の結びにも、私は次のように書いた。「事実認識は価値判断の道案内をするのであり、事実認識は価値判断を覚醒させる決定的な役割を担っているのだということ強調したい」。

いまや福島原発事故を踏まえて、科学者・技術者は、自己のあらゆる知識、原子力についての事実認識を総動員して、原子力発電の危険性を告発し、同時に、これに代わる自然エネルギーの活用可能性（この問題は事実判断の問題でもあるが、将来の問題なので価値判断でもあり、両者の区別はつきがたい）を大いに喧伝・あるいは発信すべきではないか。事実判断こそ基本であって、それとは別に、価値判断がどこか他のところから出てくるわけではないのである。

参考文献

本稿のテーマについては、やや詳しい学説史的考察を含めて以前に拙稿を発表しているので、ここに付記する。

鯉坂真「事実と価値」、鯉坂真他著『人間とは何か』所収（青木教養選書、1984）。なお、この論文に手を加えて、次の本にも収録した。「価値とは何か」、鯉坂、上田、黒田、山川共著『倫理学—人間の自由と尊厳』所収（世界思想社、2004）。

（あじさか・まこと：関西大学名誉教授、哲学）